

## 〈他者〉を楽しみ続ける子どもの育成（3年次）

### — メタ認知を働かせる学習活動と評価でカリキュラムを編む —

研究部

#### 1 令和の社会を生き抜く子どもの育成

令和2年度より「〈他者〉を楽しみ続ける子ども」を目指す子ども像と研究主題に掲げ、その育成に向けた実践研究に取り組んできている。研究の副主題については、研究の進み具合等に応じて具体的な目標として設定することとし、1年次は「エモーショナルな力で描く教育デザイン」、2年次は「メタ認知を促す指導と評価の構造化」を掲げ研究を進めてきた。本年度は、本研究の3年次となる。

研究主題、そして副主題に掲げてきた以下の言葉は、本研究を貫く考え方でもあるので、次に整理して書き記しておく。

〈他者〉・・・自分にとって「異質な対象」を指し、一般的な「他者＝他の人間＝他人」に限らない。〈他者〉とは機能性のことであり、〈他者〉性を発揮した対象のことを指す。

〈楽しみ続ける〉・・・「自分の認識内では収まらないもの」に対しての抵抗感や負荷感を超え、〈他者〉との出会いに肯定的な印象をもつ。そして、〈他者〉との出会いによって、自分を更新しようとしているかといった「動的な過程」の充実に着目する授業観への転換を重視する。

〈エモーショナルな力〉・・・〈他者〉を楽しもうとする情動・情緒

〈教育デザイン〉・・・学校における教育活動全てを通しての育成を考える。

〈メタ認知〉・・・自分の学びを省察し、自己修正できる力

#### 2 「授業の事実から、「大切にすべき行為」を見出す

##### （1）授業における「対象・学習者・教師」の関係性への着目

本研究は、授業研究を軸とした学校カリキュラム創出への試みである。つまり、日々の授業実践から「〈他者〉を楽しみ続ける子ども」の具体の姿を見出したり、その姿が見られたときの状況（他の子の反応や教員の指導、学習環境など）を探ったりしていくことを積み重ね、そこで得た知見をもとに、本校独自の新たなカリキュラムを創出していきたいと考えているのである。

私たちはまず、授業実践をしながら「〈他者〉を楽しみ続ける子どもの姿」を見出し、その事実を蓄積していった。そして、授業で見出した「〈他者〉を楽しみ続ける

子どもの姿」から「〈他者〉を楽しむ姿を引き出す状況」と教員の授業デザイン（手立て）を整理していく際、石井（2020）の「学習者、教材、教師の関係構造」（図1）を参考にすることにした。

石井（2020）は、「授業という営みは、教師と子ども、子どもと子どもの一般的なコミュニケーションではなく、教材を介した教師と子どもたちとのコミュニケーションである点に特徴がある」とした上で、図1のように、「子どもを教材（対象世界）と出合わせ没入させ、学びの深さへといざなうような授業を構想することが課題」と述べている。また図1について、

「教師と学習者は、同じ対象を共有し、協同して活動している点で対等な関係にある一方で、図の位置関係が示すように、教師は、いわば先行研究者として、学習者の学習活動を見通し導きうる位置にある。」と説明するなど、授業における教師や学習者の関係性を図の位置で表したり、教師の指導性を矢印（対話）で示したりしている。

この図1のように、授業における「対象世界（教材）・学習者・教師」の関係性、さらには学習環境にも着目することは、本校の〈他者〉研究で目指す授業像とも合致する。そこで、図1を参考にしつつ、以下に示すようなことを強調したいと考え、図2・図3・図4のように再構築した。

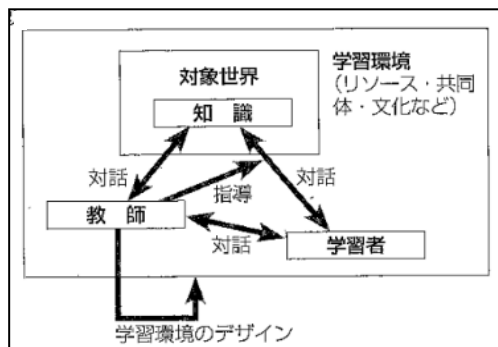


図1 学習者、教材、教師の関係構造（石井，2020，p174）

- ・授業における「対象・学習者・教員」の関係性は、単元の学習を積み重ねる中で、また一授業の中でも変化していく。それらの関係性の変化を強調するため、「対象との出会い」、「〈他者〉が立ち上がる」、「〈他者〉を楽しみ続ける」の3つに分けて明記することにした。
- ・対象世界の中に、教員としての意図（指導内容）をなるべく含めたくないことを強調するため、本研究の1年次から使ってきた「対象」で明記することにした。
- ・教師も授業を行う中で、『指さし、導く』役割を果たす、「学習者にとっての〈他者〉となる」など、これまでとは違った役割が求められる。そこで、教師ではなく「教員」と明記した。
- ・「対象・学習者・教員」の関係性（矢印）は、「楽しむ」である。授業の中で、その関係性が強くなっていくことをねらい、授業の進み具合に応じて太さを変えて明記した。

## （2）各教科における〈他者〉を楽しみ続ける子どもの姿

図2は、授業導入時（単元の初期段階）における「対象・学習者・教員」の関係性を構造的に示したものである。

対象について教員は教材研究を事前に行っているため、学習者よりは近い位置関係

にある。学習者は対象に対して積極的にかかわっていかようとしているが、その主体性はまだ弱い状態である。教員は、学習者にとっての〈他者〉が立ち上がることをねらい、対象と学習者の関係と学習環境自体に指導性を発揮していく。ここで、どのような授業デザイン(手立て)を行うかが、まず重要となる。

その後、図3のように、学習者にとっての〈他者〉が立ち上がったとする。その〈他者〉は対象かもしれないし、その場にいる他の学習者かもしれない。どちらにしても、学習者にとっての〈他者〉が立ち上がった時は、その学習者の主体性は強くなるだろう。しかし、その場に居る学習者全員に、一斉に〈他者〉が立ち上がるとは限らない。個によって違うことを前提として考えたい。その上で、こういった場面における学習者の姿を「〈他者〉を楽しむ姿」として捉えていった。

また、ある学習者にとっての〈他者〉が立ち上がったとしても、その〈他者〉と学習者がどのような関係性になるかも個によって違ってくる。その授業のある一場面だけで途切れるかもしれないし、単元の学習を通して続くかもしれない。本研究においては、対象に対する学習者の抵抗感も薄れ、図4

に示すような関係性が築けて、本時や本単元だけでなく、別の単元でも、他の教科の活動においても、「楽しみ続けている」姿が見られるように指導を積み重ねていきたい。そのような考えから、学習者のメタ認知が働くような活動や評価活動を取り入れることも、教員の重要な授業デザインの一つだと考え実践してきている。

### (3) 各教科で大切にしたい状況・行為

図3をもう一度見て頂きたい。ある学習者にとっての〈他者〉が立ち上がったとき、その場の学習環境はどのような様子だったのだろうか。「対象・学習者・教員」の関係性は、どのようになっていたのだろうか。私たちは、〈他者〉を楽しむ子どもの姿が見られた時の状況(他の子の反応や教員の指導、学習環境など)を振り返り、考察を進めてきた。その結果を整理したものが、表1の「〈他者〉を楽しむ姿を引き

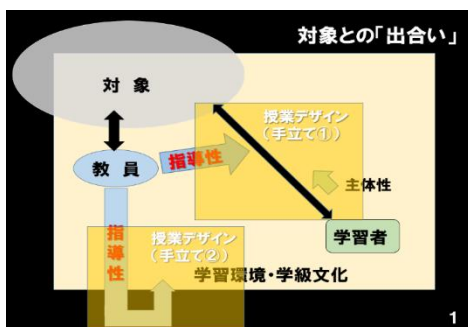


図2 授業における「対象-学習者-教員」の関係性①

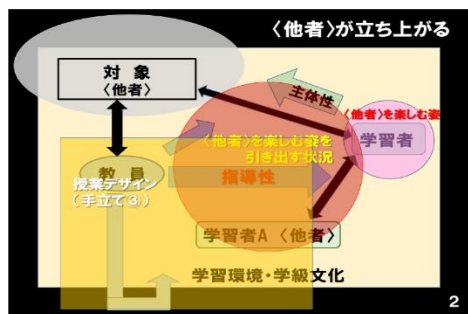


図3 授業における「対象-学習者-教員」の関係性②

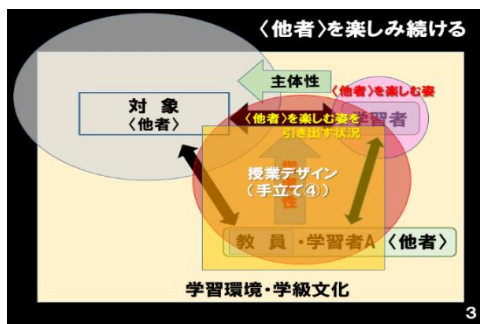


図4 授業における「対象-学習者-教員」の関係性③



出す状況」である。また、その表1には、もう一つ「大切にしたい行為」という欄を設けている。授業の事実から見出した「子どもの姿」「状況」「授業デザイン（手立て）」を整理した上で、その教科の学習に欠かせない子どもの「行為」（教科によっては「活動」）として教員が考えているものである。ここに挙げた「行為」は、今後も継続する授業実践の中で多少の変更が出てくるかも知れないが、本校独自のカリキュラムを創出していく際の要件の1つになっていくものだと考えている。

### 3 メタ認知を働かせる学習活動と評価でカリキュラムを編む

メタ認知を働かせる授業について、これまでの授業実践から大きく2つの研究の方向性が見出せている。1つは、「メタ認知を働かせる場面を探る」こと。そしてもう1つは、「メタ認知を働かせる機会を設定する」ことである。

#### (1) メタ認知を働かせる場面

算数科では、授業において子どもがメタ認知を働かせる場面には、いくつかの出来事に関係しているのではないかと考えた。次の表2は、算数科授業を数名の先生方に参観して頂き、子どもたちの様子からメタ認知をしているであろう場面や出来事を挙げてもらい、それをもとに作成したものである。子どもがメタ認知を働かせている場面として、授業の4場面と5つの契機が見出せている。しかし、事例の数はまだまだ少ない。今後さらに事例を集め検証していきたい。

メタ認知を働かせる出来事	契機
・自分のしたいことだけでなく、本時の学習の目的も考慮に入れて判断しようとする。	自己と目的の相対化
・互いの数学的表現が解釈できず、分かち合えない。	仲間の反応、表現方法の選択
・前時の内容を確認するなど、自分なりの説明を模索する。	教員からの指示
・既有知識を総動員して自分の考えを整理する。	知的好奇心の発動

表2 子どもがメタ認知を働かせた場面

また、子どものメタ認知には教師の役割が重要となることが指摘されてきている（平林・重松，1986）が、授業の中で子ども（学習者）に影響を与えるのは教員だけではない。その場で共に授業を創り上げている他の学習者も大きく関係してくる。

音楽科では、瞬間的に消えゆく演奏の直後に感想を交流する（メタ認知を働かせる）ことで、「聴いて」確かめることや「聴きながら」演奏することにつながることを目指しているが、その交流が充実するためにも、子どもがメタ認知を働かせる場面を増やし慣れさせていくことが大切である。

#### (2) メタ認知を働かせる機会の設定

英語科では、英語によるパフォーマンスと「Reflection Sheet」を上手く機能させることで、パフォーマンスの向上と、主体的な学びの実現に成果を見出してきている。また、理科では、「ゴムのはたらき」や「磁石のはたらき」、「電気のはたらき」といった単元同士の学習内容を子ども自ら比較し、共通点や相違点を見出したり、自分の考えの変容を捉えさせたりすることを促すため「発見シート」を作成させてきた。その結果、学習を重ねるごとに、子どもの付箋にメタ認知した記述が増えてきたことが確かめられている。

図5は、第3学年社会科「これからの子ども図書館を考えよう」において、子どもが作成した「メガネシート」である。毎時間、授業の最後に、自分の意思決定とその支えとなった見方や考え方を記述してきた。これを作成してきたことで、次時の学習だけでなく、別の単元においても「今日は、〇〇のメガネで見てみよう」といった発言が聞かれるなど、子ども自ら意識してメガネ（見方や考え方）を活用していこうとする姿が見られている。

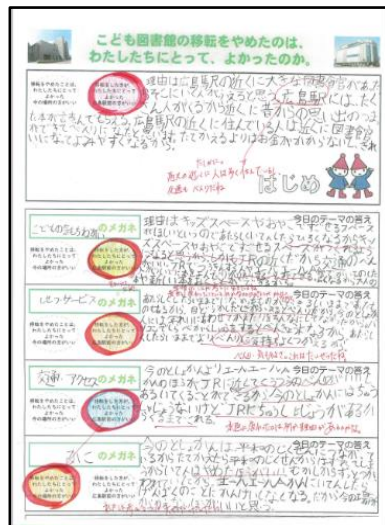


図5 第3学年社会科「メガネシート」

これらの実践のように、メタ認知を働かせるためには、その時間の学びを子ども自身が振り返ることで、その子の学びが深まっていくことをねらい設定しなければならない。また、メタ認知を働かせる機会は授業の最後だけではないし、記述させることだけが方法ではない。子どもがメタ認知したことを話すことも大切である。

### (3) カリキュラムを何で編むか

本研究は、授業研究を軸とした学校カリキュラム創出への試みである。現時点では、カリキュラムを創っていく際の軸は、はっきり決まてはいない。しかし、研究授業を通していくつかの方向性が見え始めている。日々の授業実践から目指す子どもの学びの姿を見出したり、その姿が見られたときの状況を探ったりしていくことを積み重ね、そこで得た知見をもとに、本校独自の新カリキュラムを創っていきたいと考えている。(文責：植田 悦司)

#### 【引用・参考文献】

- 石井英真 (2020)「授業づくりの深め方ーよい授業をデザインするための5つのツボー」, ミネルヴァ書房
- 重松敬一 (1987)「数学教育におけるメタ認知の研究(2)ー問題解決行動における「内なる教師」の役割ー」, 日本数学教育学会論文発表会
- 中央教育審議会 (2022)「『令和の日本型学校教育』の構築を目指してー全ての子供たちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びの実現ー (答申)」, 令和3年1月26日